

元愛媛大学長執念の自費調査

四国電力(以後、四電)伊方原発(愛媛県伊方町)の近く、活断層がある。元愛媛大学長の小松正幸氏(地震学)が抱いた疑いは、一月に出た広島高裁の運転差し止め決定の要因にもなった。七十八歳の今も真実を追い求め、自らから軽トラのハンドルの重りを、片道で半日かけて現場へ。ロープに身を委ねて崖を下り、海岸の岩場で断層を調べる。なぜそこまでするのか、調査に同行した。

(大野孝志)



高裁差し止めの争点

敷地内に施設が密集する伊方原発。左から1、2、3号機＝愛媛県伊方町で



特報

600m沖の疑い

小松氏がこれまで執念を燃やしたのは、九年前の福島での原発事故が理由だ。「原発は地震や津波でも安全だと聞き、容認してきた。浅はかだった。福島沖であつただけの大津波が起きたら、一部が地質学者は警告していたのに、私も含め大々的に問題視しなかった。なぜ事前にも警告できなかったのか。すべし反省して。」

二〇一六年、四電が描いた伊方原発の地下構造の断面図を知り合いの弁護士から見せられた。西南日本の地質を知っていた小松氏は、断面図と分かるはずの地質の項目になぜかそれが描かれていない。「これが試験問題への解答なら、×だ。四電は何かを隠さず描いておきたいのか。気付いたからには後に引けない。自分でもやめなさい。」



伊方原発の近くで活断層が存する可能性を警告する小松正幸氏。元愛媛大学長。愛媛県砥部町で

「二、三つ、まぎれよ。一九九四年長岡原生生まれ、北海道大学理学部卒。新潟大助教授を経て、愛媛大学理学部教授。北海道、白根震域の研究で'93年、日本地質学会賞を受けた。08、2009年、同賞受賞。03、09年、愛媛大学長。10年、厚木の政治に地質学を専攻。県知事選に立候補、落選した。」

起されれば、伊方原発が受ける揺れは大きくなり、今の地震対策では不十分となる。

注目したのは半島の先、別府湾の海底地形。一九九二年に京都大が調べた海底の地形は、中央構造線が造ったおわんのような「半地溝(ハーフトラベンチ)」で、堆積物は比較的新しくかつた。中央構造線が最近動いた可能性を示していた。

九四年の愛媛大の解析でも、伊方原発の北に広がる伊予灘に、別府湾のような「ハーフトラベンチ」が横たわっていることを示唆していた。二十年以上も前の調査結果を踏まえると、伊方原発の六百m沖に活断層が存在する疑いは強まった。

直接証拠なし

国の地震調査研究推進本部は二〇一七年、中央構造線の長期評価を改訂し、小松氏の主張に沿う形で中央構造線の位置を描いた。小松氏は翌年、山口地裁岩国支部で運転差し止め仮処分申請の証人尋問に立ち、調査結果を説明した。今年一月、広島高裁は長期評価と小松氏の主張から、伊方原発の近く近くに活断層が存在する可能性を「否定できない」として、運転差し止めを決めた。

四電は決定を不服として、取り消しを求めて異議を申し立てた。原発近くの活断層の有無は、今後も争点になる。「今あるのは間接証拠ばかり。原発近くの中央構造線が活断層かどうか直接的な証拠はまだありません」と小松氏。中央構造線は海底の下で見るとはできない。だから海岸を調べないといけない。「四電も私も、主張は仮説にすぎない。真実かどうか分からないという同等に扱って、きりきり調べるな。」

四電に入った教子もいる。だが、伊方原発が事故を起こせば、瀬戸内の漁業や沿岸の農業は全滅するだろう。「教子には申し訳ないが、真実を解明しなければ、暴走すれば人の手に負えない原力は、利用すべきではない。まして、疑いがある原発を動かすのはいけないのだ。」

伊方原発近くに活断層はあるのか

岩場に響く。打ち上げ音をほうぼう歩いて回り、断層の構造を調べる。前後の雨で足元が滑り、風で体がおおられる。油断すれば転んで、海に落ちそう。記者もついてくつのがやめた。すぐに腰が痛くなったが、小松氏は笑顔で「ここは初心者コースです」と言う。

五月二日、干潮を狙って、伊方原発近くの岩場を歩いた。表面に現れた無数の断層群の個性や向き、力のかかり方を調べ、整理する。それが沖合を走る日本最大の断層、中央構造線と周辺の関係にあるかを探る。原発近くの中央構造線が活断層であることの証拠を得たいのだ。

岩場には断層がいくつも走り、無数のひびが入ってぼろぼろ。大きな断層が動いて崖が破壊された「タメーション」ひびきもみせしめてくる。「同様の岩場が原路の下にもあるはず。」

ロープをたどり寄せて崖をよじ登り、軽トラに戻ると、さらに西へ。原路の西約十五km、半島の先端に近い伊方町の「番匠」に移り、釣り人と連れ違ひながら急な石段を下りる。

巨大な岩がごろごろ積み重なり、いくつもの系列の断層がぼろぼろの向きに走る。「この一帯は幅五十〜六十mの新断層群です。ほら、これは



伊方原発近くの断層群。中央構造線と周辺の関係にあるかを探る。記者もついてくつのがやめた。すぐに腰が痛くなったが、小松氏は笑顔で「ここは初心者コースです」と言う。



「福島事故を事前に警告できなかった。浅はかだった」

「四電も私も、主張は仮説にすぎない。真実かどうか分からないという同等に扱って、きりきり調べるな。」

四電に入った教子もいる。だが、伊方原発が事故を起こせば、瀬戸内の漁業や沿岸の農業は全滅するだろう。「教子には申し訳ないが、真実を解明しなければ、暴走すれば人の手に負えない原力は、利用すべきではない。まして、疑いがある原発を動かすのはいけないのだ。」